

青丘文庫研究会 月報

No.262

2012年7月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000円
 ※他に、青丘文庫に寄付する図書購入費として2000円/年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

祖母の歌集

宇野田 尚哉



この『月報』の第259号(2012年2月)に掲載された塚崎昌之さんのエッセイ(「シベリア抑留と父」)に強い感銘を受けた読者は少なくないと思う。シベリア抑留を生き延びたお父様の人生を、その帰りを待つあいだ辛酸を嘗めたご家族の経験とともに淡々と綴ったこのエッセイが、私にとってとくに感銘深かったのは、このエッセイがそのまま、塚崎さん自身の研究のあり方や教師としての生き方の来歴を説き明かすものとなっているように思われたからである。近現代史を研究するうえで、前の世代の人々の歴史的経験との〈つながりの感覚〉は、いかなる理論よりも重要なのではないかと私は思うが、塚崎さんのエッセイはそのような感覚の滲み出た、お父様への追悼文であったと思う。

塚崎さんのエッセイを読んでいて、なぜか数年前に祖母の遺稿を読んだときの感覚を思い出した。なぜそんなことを思い出したのか自分のなかでも十分に文脈化できているわけではないのだが、以下ではそのことを少し記してみたいと思う。

私の祖父は、1893年に鳥取に生まれ、鳥取一中、小樽高商を経て、1918年に鈴木商店に就職し、京城支店営業部勤務中に1927年の鈴木商店倒産に際会した。祖父が祖母と結婚して財産を処分し朝鮮に渡ったのは1922年のことで、鈴木商店倒産後もおそらくはそこで学んだノウハウを生かして朝鮮で会社勤めを続けた。自筆の履歴書によると、敗戦の時点では、「朝日興業株式会社支配人」兼「日東製薬株式会社取締役」で、「全朝鮮酸(ママ)素協会理事」「朝鮮カーバイド協会理事」を兼任していたらしい。私の祖父は、高商から植民地の実業へという道を歩んだ、絵に描いたような“帝国主義の担い手”であったということになるだろう。

一方、1901年生まれの祖母は、鳥取高女卒業後、明石の女子師範で教員養成講習を受けて、1919年に尋常小学校の正教員となっているから、当時としては教養ある女性だったということになる。祖母は、婚礼の際に初めて会ったという祖父と、そのまま22歳で朝鮮に渡ることになる。興味深いのは、短歌と書道を嗜んだ祖母が、それらを本格的に学んだのは朝鮮においてであったということである。家に朝鮮人女性のお手伝いさんなどがいたのは確かであるとしても、わずかに残されている資料を見るかぎり、祖母は内地人だけの閉ざされた世界のなかで日本の文化を学んでいたように見受けられる。

祖父の仕事の関係で、父は、平壤で生まれ、仁川で幼稚園に通い、馬山で小学校に入り、釜山を経て、京城に落ち着いた。京城では、南山を望む高台の青葉町に居住し、青葉小学校を卒業して龍山中学校に通っていたときに敗戦を迎え、一家で引き揚げたという。父は朝鮮時代のことを語りたがらないのでよくわからないのだが、仙崎に着いたのは1945年11月のことだったらしい。

祖父母は私が小学校低学年だったときに亡くなったので、私には祖父母の記憶はない。ただ、両親が祖母の遺稿を整理して歌集を編んでくれていて(『偲ぶ草 宇野田翠子遺稿集』, 1971年)、私はわずかにそれを通して祖父母に接することができるのみである。長く関心を持つこともなかったこの遺稿集に私が初めて目を通したのはわずか数年前のことなのだが、そのなかの「移動動物園」

という詞書をもつ 1951 年頃の次のような歌が、不思議なほど印象に残った。「幾(いく)度(たび)か子らともなひし昌慶苑の二頭の巨象ふと思ひ出づ」。日本は、李朝の王宮昌慶宮に動物園や植物園を作り、昌慶苑と改称した。かつていくたびか子供たちを連れて行ったその動物園の巨象のことを、引き揚げてきた鳥取で移動動物園に行きあいその象の小さいのを見て「ふと思ひ出」した、というのである。20 代初めから 40 代前半の 20 余年間という長い時間を過ごした朝鮮のことを祖母はいつどのように「ふと思ひ出」しながら残りの人生を過ごしたのか、そもそも祖父母にとって朝鮮体験はどういう意味を持っていたのか、あるいは父にとってはどうなのか。さきに引いた歌を読んで、そんなことを考え始めたのである。上述した祖父母や父の履歴も、そんなことを考え始めてから調べたことにほかならない。

私自身、在日朝鮮人史の研究に片足を突っ込むようになったから祖父母や父の朝鮮体験に関心が向かったのか、あるいは、朝鮮植民者の祖父母や父を持つから在日朝鮮人史の研究に関心が向かったのか、よくわからない。ただ、両者が無関係でないことははっきりしているし、そのことを大切にしたいとも思っている。そんなことを漠然と考えていた私にとって、身近な人をめぐる淡々とした叙述のなかから歴史への向き合い方が浮かび上がってくる塚崎さんのエッセイは、とても示唆的だったのであった。

第333回在日朝鮮人運動史研究会関西部会（2012年5月13日）＜報告1＞

朝鮮植民者二世小林勝の文学と朝鮮 原 佑介



小林勝は、1927年に植民地朝鮮で生まれ、1944年春からは陸軍士官候補生として生き、「特攻要員」のまま17歳で敗戦を迎えた。戦後間もなく戦闘的な共産主義者に変貌し、1971年に43歳で病死するまで、朝鮮問題で苦悩し続けた。1952年6月、朝鮮戦争反対デモで火炎瓶を投げて逮捕された23歳の彼は、獄中で小説を書き始め、やがて小説家となった。その文学主題の中心は、最初から最後まで、彼が生まれ育った朝鮮であった。戦後日本において、小林勝ほど朝鮮問題に真摯に取り組んだ文学者は他にいない。

敗戦当時、70万人以上の日本人植民者が朝鮮にいたが、ほとんどの者がその地を追われ、旧「内地」に移住した。いわゆる「引揚げ」である。「引揚者」の圧倒的多数が、戦後日本における生活の中で、植民地朝鮮の記憶をあるいは忘却し、あるいは封印し、あるいは懐かしく想起した。苦々しさや悔悟の念とともにぼつりぼつりと語る者もいくらかいた。そのような中、小林勝は、他の誰とも異なる回路から、朝鮮に向かっておずおずと手をのばした。

小林勝の文学と生き方を集約したといえる最晩年のエッセイに、「『懐しい』と言ってはならぬ」〔1971〕という短文がある。新興書房刊の『朝鮮文学』という非常にマイナーな雑誌に発表されたもので、これが生前最後の刊行物となった。結果的に遺言のような形をとることとなったこの短文の冒頭で、小林勝は書く。「小説を発表するようになってから十数年たった。その間、主として、『日本および日本人にとって、朝鮮および朝鮮人とは何か』を探りつづけてきた。これからもずっとそうだろう。」しかし、1971年3月の死が、目前に迫っていた。この時すでに小林勝は、度重なる心身の病と酷使によって、もはや社会生活をまともに営めない状態に陥っていた。エッセイで小林勝は、自らの文学と人生を次のように集約している——「私は『懐しい』という感情の、決して『懐しく』あってはならぬその対極から、その『懐しさ』をうちこわしまったく新しい握手をしなければならぬその道をさがしもとめつつ書いている」。

植民者二世の小林勝が、自身のうちにある出生地朝鮮への「懐しさ」を乗り越え、その先で朝鮮と交わそうとしていた「新しい握手」とは何か。彼になぜそれが必要だったのか。彼はどのようにそれを構想し、模索したのか。そして、それが彼の死から40年がすぎた今日、どのような意味を持つのか。朝鮮半島問題や在日朝鮮人問題を冷静に考察する上で、朝鮮植民者二世という出自を引き受けて戦後日本を生き延びた小林勝の苦悩の文学は、今もなお重要な参照項であり続けている。

小林勝の著作が収録された書籍で比較的入手しやすいものを以下に挙げておく。

『小林勝作品集』（全5巻、白川書院、1975-1976年）／「フォード・一九二七年」『戦後短篇小

説再発見 7 故郷と異郷の幻影』(講談社文芸文庫、2001年) / 「軍用露語教程」『コレクション 戦争と文学 15 戦時下の青春』(集英社、2012年) / 「架橋」『コレクション 戦争と文学 1 朝鮮戦争』(集英社、2012年6月刊行予定) / 「フォード・一九二七年」『コレクション 戦争と文学 17 帝国日本と朝鮮・樺太』(集英社、2012年9月刊行予定)

第333回在日朝鮮人運動史研究会関西部会(2012年5月13日) <報告2>

戦前期大阪朝鮮人社会とシカゴ黒人社会の比較研究：マイノリティの経験をグローバル・ヒストリーの中に位置づけて

堀田千里 (広島経済大学) e-mail: chottajp@yahoo.co.jp

この発表は大阪の朝鮮人コミュニティとシカゴの黒人コミュニティの1920年から1945年までの経済的・社会的・文化的そして人種的経験を相互作用の視点を取り入れ比較検討することにより、地理的にも離れ歴史的にも全く異なる(例えば、奴隷制と植民地支配)二つのマイノリティ・コミュニティが、いかに、なぜ似通った経験をもったかを明らかにする。それを通じて、人種・民族関係を歴史的に理解することに役立てると同時に、世界のマイノリティと周縁化された人々の歴史的経験の理解を助けるための理論的枠組みを提示することを目指す。本発表を通じて、国家や人種・民族の境界を超えるこのプロジェクトの重要性と今日的意義を深く掘り下げる。

まず、比較研究の正当性を、資本主義のグローバルな発展・展開という歴史プロセスの中にもとめ、世界的大工業都市である大阪とシカゴの際立った共通点を明らかにし、朝鮮人と黒人を選択した理由を明示する。また、人種/人種主義/人種化という言葉の定義をおこない、人種とエスニシティの違い、そして日本の人種主義と西洋の人種主義の違いを明らかにする。それらをふまえ、本論に入る前に、それぞれのコミュニティの形成過程を手短に紹介し、この発表の中心的な課題である、朝鮮人、アメリカ黒人に対する偏見と差別の実態を明らかにし人種主義を産出する社会構造を検討する。その中で、彼らの人種的経験の重要な差異や類似点をあきらかにし、それらがはらむ問題点を摘出する。具体的には、住居隔離と人種化との関連や、被差別集団の関係、肌の色の違いと差別の度合いとの関連等を取りあげる。

またこの発表では、比較研究を通じて明らかになってくる理論的枠組みを提供する。たとえば、消費主義と資本主義の関連を討論することで、不動産価値(property value)そして住宅所有の意味を問かけると同時に、住宅隔離と階級、人種、ジェンダーとの深い繋がりを明らかにする。さらに、近代国家と人種の関係では、「良質な人口」を作り出すという国家の願望は、世界的にひろがった科学的人種主義とりわけ、優生学思想とむすびつき、それが、従来からある差別思想と融合したということを明らかにする。加えて、このグローバルな視座をもった比較研究は、移民人口が増加する中で現在生じている人種間の軋轢を解決する手段を見いだす上で有効ではないかと考える。

それと同時に、この発表では、朝鮮人・黒人コミュニティの負の経験だけではなく、差別に対抗する中で、構築された、人種・民族アイデンティティやコミュニティの多様性を示し、従来犠牲者としてのみ、描かれてきた彼・彼女らを、歴史とコミュニティの主人公として位置づけ、逞しく活力のあるコミュニティ像の明示を目指した。最後に国と人種をこえたこの比較研究は、大阪の朝鮮人とシカゴの黒人のコミュニティの経験を比較するだけにとどまらず、それらの経験のグローバルな繋がりを見いだすことで、この発表の重要性と今日的意義を明らかにし、かつ比較歴史学研究に於ける「実証」と「理論」の両立の大切さを示す。地理的にも、時代的にも限られた二つのマイノリティ・コミュニティの経験の比較ではあるが、この発表によって、マイノリティ研究に新しい境地を開くことに少しでも貢献したい。

●神戸学生青年センター・現代キリスト教セミナー●

「神戸中央神学校の朝鮮人留学生たち」

改革派神学校教授・日本キリスト改革派山田教会牧師 牧田吉和さん

米国南長老教会宣教師・SP ハミルトンが1907 (M40) 年に設立した「神戸神学校」は、その後名称を「神戸中央神学校」と改めますが、1942年3月に「自主閉校」します。その神学校はその後日本軍に接収され連合軍捕虜病院として使用されたことも知られています。神学校には朝鮮人留学生が多く、現在の韓国では、卒業後朝鮮での宣教活動で神社参拝に反対して検挙された方が多いということも知られています。1941年12月には、「在神戸中央神学校朝鮮人学生民族主義グループの策動」により5名の留学生が検挙される事件もおこっています。このテーマで研究をされている牧田さんからお話をうかがいます。

日時：2012年7月17日(火) 午後7時

会場：神戸学生青年センター TEL 078-851-2760 / 参加費：600円

主催：(財) 神戸学生青年センター (担当：飛田)

●青丘文庫研究会のご案内●

■朝鮮近現代史研究会 ※お休みです

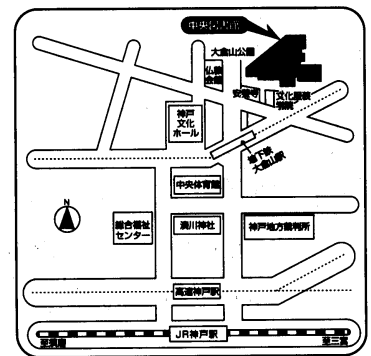
■第335回在日朝鮮人運動史研究会関西支部

7月8日(日) 午後3時～5時

「1951年東京朝鮮人中高級学校事件

—戦後の布施辰治と朝鮮人〈その1〉」 川口祥子

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



【今後の研究会の予定】

8月はお休みです。9月10日(日) 在日(未定)、近現代史(鈴木常勝)。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

9月号以降は、斎藤正樹、本岡拓哉、高野昭雄、李景珉、李裕淑、小野容照、梶居佳広、中川健一、黒川伊織、砂上昌一、三宅美千子、佐野通夫、吉川絢子、安致源、伊地知紀子、太田修、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願ひします。締切は前月の10日です。

【編集後記】

- ・ 今年はずっと台風がやってきましたが、みなさまのところでは被害はなかったでしょうか。6月の月報は、お休みさせていただきました。メールで研究会の案内のみお送りしました。
- ・ 電子出版がはやりそうですね……。神戸学生青年センター出版部の絶版本の電子出版を計画しています。まずは、好評で増刷本も品切れとなっている故鄭鴻永さんの『歌劇の町のもうひとつの歴史—宝塚と朝鮮人—』を電子出版の予定です。再版も同時に行います。またご案内いたします。飛田 hida@ksyc.jp